



オオヒシクイの飛来＝稲敷市の稲波干拓地
(稲敷雁の郷友の会・小玉和夫さん提供)

今年も「オオヒシクイ」が越冬のために霞ヶ浦の南「稲波干拓地」に渡ってきた。「稲敷雁の郷友の会」の約60人が観察小屋を拠点に保護に当たっている。すでに約100羽が飛来しているという。オオヒシクイは両羽を広げると160～200センチほどの大型の渡り鳥で、国の天然記念物に指定されている。ロシアのカムチャツカ半島で成鳥になり、冬が近づくと北海道に、さらに南下してこの干拓地に飛来する。

2016.11.13

「気象コンパス」主宰

古川 武彦



オオヒシクイの飛来

オオヒシクイはガンの仲間、時速50キロ以上で夜間も飛ぶと聞いた。この時期偏西風が強まり、上空千メートルでは、しばしば風が秒速30メートル（時速約100キロ）程度になる。しかも偏西風は南北に蛇行するため、風向きも場所によって西寄りから北へと幅が広い。彼らが南に飛ぼうと思っても偏西風で流されるはずだから、常に舵（かじ）を取る必要がある。どのように方角や地形を認識して、同じ場所にやって来るのだろうか。

同会の会員によれば、やって来るのは代々すべて一族。他へは渡らず、毎年の旅路でこの地に到る知恵を学ぶという。彼らには偏西風を予想する能力はないはずだが、人も及ばない視力と記憶力、知恵を備えているようだ。

9日、関東地方に「木枯らし1号」が吹いた。早めに冬物の準備を。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



紅葉が見ごろとの情報を得て、常陸太田市の竜神峡を訪れた。山肌を染める色とりどりの紅葉と点在する常緑樹の緑、竜神川をせき止めたダム湖の上空100メートルに架かる全長375メートルの青い大つり橋とのコントラストが印象的。バンジージャンプに挑む人がつり橋から飛び降りるたびに見物客の歓声が上がる。4秒ほどで約80メートルを一気に落下する。

秋が深まると人々は紅葉を求めて、行く秋を

2016.11.20

「気象コンパス」主宰

古川 武彦



紅葉前線

惜しむ。紅葉の見頃を意味する紅葉前線は、11月中旬に北海道を出発して南下し、関東地方には11月中・下旬に訪れる。

カエデの葉は、気温が一定以下になると老化が進み、葉茎の元に膜ができて水分や栄養の通路が遮断され、その後は「アントシアニン」という色素の働きで紅葉する。

紅葉の予想は一般に9月の平均気温をベースに予測式を導いて行われている。気象庁は紅葉や桜の開花などの観測は従来通り行っているが、1965年以来行ってきた関東地方のみを対象とした紅葉予想の発表を2008年に取りやめ、民間に委ねた。桜の開花予想も10年に終了した。

近年、秋の気温低下の遅れで紅葉の時期が遅れる、あるいは桜の開花時期が乱されていると聞く。地球温暖化の影響が気になる。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)